

信徒の覚悟

——ルカ9:57-62の釈義的考察——

嶺 重 淑

序

イエスに信徒していく者の覚悟について語るルカ9:57-62（並行マタイ8:18-22）のテキストは、その極めてラディカルな内容のゆえに、過去の解釈者たちを困惑させてきたが、それだけに今日に至るまで多様な解釈が試みられてきた。信徒の主題については、ルカ福音書においても、最初期の弟子たちの召命（5:1-11）、レビの召命（5:27-32）、信徒の道（9:23-27）、信徒の条件（14:25-33）、金持ちの議員（18:18-30）等の段落において扱われているが、その多くが所有放棄の主題との関連で述べられているのに対し、このテキストにおいては特に家や家族との訣別（ルカ14:26; 18:29-30のみ参照）が強調されている点で、やや性格を異にしている。

このテキストはルカの文脈において、イエスが弟子たちを伴ってエルサレムへと旅をする、いわゆるエルサレムへの旅行記事（9:51-19:27）の冒頭部分に位置しているが、ルカ福音書に特有の記事を数多く含むこの箇所には、この世にあってどう生きるべきかという、総じて倫理的な主題が扱われている。一方で、マタイの並行箇所は、イエスが嵐を静める奇跡物語の導入部に位置づけられており（マタイ8:18-22）、その意味でもルカとマタイの文脈は明らかに異なっており、両者の強調点も自ずと異なっている。

1 ルカ福音書における所有放棄については、拙著『ルカ神学の探究』、教文館、2012年、110-133頁を参照。

本稿ではルカ版のテキストに注目し、ルカの文脈において、このテキストが誰に向けられ、具体的に何を要求しようとしているか、さらにルカ福音書全体においてこのテキストがどのような機能を果たしているかという点について、積義的に検討していきたい。

1. 私訳

9:57 さて、彼ら（一行）が道を進んで行くと、ある人が彼（イエス）に、「あなたがどこに行かれようと、あなたに従います」と言った。⁵⁸ そこでイエスは彼に言った。「狐たちには穴があり、空の鳥たちには巣がある。だが人の子には頭を横たえるところもない」。⁵⁹ また彼（イエス）は別の人に「私に従いなさい」と言った。しかし彼は、「[主よ、] まず自分の父を葬りに行くことを私に許してください」と言った。⁶⁰ しかし彼（イエス）は彼に言った。「死人たちに自分たちの死人たちを葬らせなさい。しかしあなたは行って、神の国を言い広めなさい」。⁶¹ また別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず自分の家の者たちに別れを告げることを私に許してください」。⁶² するとイエスは〔彼に〕「鋤に手をかけてから後ろを振り返る者は神の国にふさわしくない」と言った。

2. 文脈と構成

サマリア人の村への弟子たちの派遣とサマリア人の拒絶について語る直前の段落（9:51-56）に続き、ここではイエスに信従する者の覚悟について述べられ、その直後には、この段落と神の国の宣教のモチーフを共有する七十人の派遣記事（10:1-12）が続いている（9:60, 62/10:9, 11参照）。その意味では、この段落は弟子の派遣について語る二つの段落に囲い込まれており、この段落にも派遣のモチーフが認められる（60節参照）²。

² なお前後の段落は、καὶ ἀπέστειλεν ... πρὸ προσώπου αὐτοῦ（9:52/10:1）、εἰσέρχομαι（9:52/10:5, 8, 10）、δέχομαι（9:53/10:10）等の表現を共有している。

この段落は、状況設定について述べる冒頭部分（57a節）を除くと、イエスと信従志願者との三つの対話により構成されている。それらはいずれも ἀκολουθέω（従う）という鍵語を含み、それぞれが、εἶπεν (6έ)（[また] ～は言った）という表現で始まる匿名の信従志願者の言葉（57b, 59, 61節）と、同様の表現で始まる信従に関するイエスの言葉（58, 60, 62節）から構成されている。後述するように、特に第二と第三の対話は並行関係が顕著であるが、ルカのテキストでは第二の対話において、イエスによる信従の要求が志願者の願いの言葉の前に位置づけられることによりやや統一性が乱され、結果的に第二の対話は、弟子の召命物語の構成（マコ1:16-20並行； 2:13-17並行； ヨハ1:43； 21:19参照）に近づいている。その一方で、そのように統一性が乱されることにより、「私に従いなさい」（ἀκολουθεῖ μοι）というイエスの信従の要求によって始められる第二の対話を、「あなたに従います」（ἀκολουθήσω σοι）という信従志願者の言葉で始まる第一、第三の対話が囲い込む構造になっている³。この段落全体は以下のような構成になっている。

- (1) 序：状況設定（57a節）
- (2) 第一の対話（57b-58節）
 - (a) ある信従志願者の決意表明（57b節）
 - (b) イエスの言葉：定住地を持たない人の子（58節）
- (3) 第二の対話（59-60節）
 - (a) イエスの信従の要求とある信従志願者の願い（59節）
 - (b) イエスの言葉：死者の葬りと神の国宣教の指示（60節）
- (4) 第三の対話（61-62節）
 - (a) ある信従志願者の願い（61節）
 - (b) イエスの言葉：鋤（62節）

3 C. H. Talbert, *Reading Luke: A Literary and Theological Commentary on the Third Gospel*. Georgia 2002, p. 124.

3. 資料と編集

この段落は全体としてマタイ8:18-22に並行していることから、総じてQ資料に由来し、Q資料においても派遣言辞(10:1-12//マタ10:5-15)の前に位置づけられていたと考えられる。なお、マタイのテキストは第三の対話を欠いており、イエスに語りかけるのは信従志願者ではなく、ある律法学者と一人の弟子である(マタ8:19, 21)。

導入の57a節は、πορεύομαι⁴、εἶπεν πρὸς⁵、τις⁶、ἐν τῇ ὁδῷ⁷等の多くのルカ的語彙を含んでおり、ルカの編集句であろう⁸。一方でマタイ版の導入句(マタ8:18-19a)は全体としてマタイの編集と考えられるが、εἰς γραμματεὺς(一人の律法学者)という表現はすでにQ資料に存在していたのかもしれない⁹。

これに続く57b-60節は逐語的にマタイの記事に並行しており、明らかにQ資料に由来する。もっともルカは、第二の対話(59-60節)において、元来は後続のイエスの言葉に含まれていたἀκολούθει μοι(私に従いなさい)という信従の要求(59節//マタ8:22)を前に移行させている¹⁰。おそらくルカは、後続の信従志願者の言葉の中の「まず」(πρῶτον)という語がイエスからの信従の呼びかけを前提としているように感じたため、この要求を前に移したのであろう¹¹。また、59節の

4 新約用例計154回中、ルカ文書に89回使用され、直前の段落にも4回(9:51, 52, 53, 56)用いられている。

5 J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, p. 33参照。

6 共観福音書用例計62回中、ルカ福音書に39回使用されている。

7 ルカ12:58; 19:36; 24:23,35; 使9:27参照。

8 M. Miyoshi, *Der Anfang des Reiseberichts Lk 9,51-10,24. Eine redaktionsgeschichtliche Untersuchung* (AnBib 60), Rom 1974, pp. 34-36.

9 U. ルツ『マタイによる福音書(8-17章)』(EKK新約聖書註解I/2) 小河陽訳、教文館、1997年、39頁。

10 H. Schürmann, *Das Lukasevangelium*, I (HThK III/1), Freiburg/Basel/Wien 1994, pp. 39-40; Miyoshi, op. cit., p. 39に反対。

11 G. Schneider, *Das Evangelium nach Lukas*, I (ÖTK 3/1), Gütersloh 1984, p. 232; F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III/1), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1996, p. 33.

εἶπεν δὲ πρὸς ... という表現 (57, 62節参照) もルカに特徴的であり¹²、おそらくルカに由来する。また、マタイ版には見られない60b節の神の国の宣教の要求 (62節も参照) について、一部の研究者はマタイは船に乗り込む前には必要としなかったために削除したと考えているが¹³、ἡ βασιλείαν τοῦ θεοῦ (神の国) という表現はルカに特徴的であり¹⁴、ルカはしばしばこの表現を言述を意味する動詞と結合させていることから¹⁵、ルカによる編集的付加と見なしうるのであろう¹⁶。さらに、マタイ8:20, 22のλέγεινに対するεἶπεν (58, 60節)、マタイ8:21のἀπελθεῖν καὶ θάψαιに対するἀπελθόντι ... θάψαι (59節) もルカの編集的改変であろう。なお、一部の研究者は58節のイエスの言葉を真正のイエスの言葉と見なししているが¹⁷、この点は明らかではない。その一方で、死者の葬りに関するイエスの言葉 (60a節) はそのラディカルな内容から史的イエスに遡ると考えられる¹⁸。

マタイに欠けている第三の対話 (61-62節) の起源については判断が難しい。一部の研究者はこの箇所をQ資料に帰し、マタイがこの対話を削除したと見なししているが¹⁹、マタイがそれを削除する理由については明らかにされていない。

12 εἶπεν δὲはヨハ12:6を除くとルカ文書にのみ計74回使用されている。さらにJeremais, op. cit., p. 33参照。

13 Schürmann, op. cit., p. 42; ルツ、前掲書、39頁。

14 新約用例計64回中、ルカ文書に38回(ルカ32/使6) 使用されている。

15 ルカ4:43; 8:1; 9:2, 11; 16:16; 使1:3; 8:12; 19:8; 20:25; 28:23, 31参照、さらにJeremais, op. cit., p. 176参照。

16 M. Hengel, *Nachfolge und Charisma. Eine exegetisch-religionsgeschichtliche Studie zu Mt 821f. und Jesu Ruf in die Nachfolge* (BZNW 34), Berlin 1968, p. 4; R. プルトマン『共観福音書伝承史I』(プルトマン著作集1) 加山宏路訳、新教出版社、1983年、155頁、さらにJeremais, op. cit., pp. 181-182も参照。

17 M., Casey, *The Jackals and the Son of Man* (Mt 8,20/Lk 9,58), *JSNT* 23 (1958) 3-22; J. Nolland, *Luke 9:21-18:34* (WBC 35B), Dallas 1993, p. 540.

18 Nolland, op. cit., p. 540; Miyoshi, op. cit., pp. 40-41; ルツ、前掲書、40頁。

19 J. Wellhausen, *Das Evangelium Lucae*, Berlin 1904, p. 47; A. Schulz, *Nachfolgen und Nachahmen. Studien über das Verhältnis der neutestamentlichen Jüngerschaft zur urchristlichen Vorbildethik* (StANT 6), München 1962, pp. 105-108; Hengel, op. cit., 4 n. 10; Schürmann, op. cit., pp. 45-46; I. H. Marshall, *The Gospel of Luke. A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1995, p. 409.

そこで他の研究者は、61-62節はルカ特殊資料²⁰、あるいはルカ版Q資料²¹に由来すると考えている。しかしその一方で、ルカが59-60節（あるいは57-60節）等をもとに、自らこの対話を構成したと考えることも十分に可能であろう²²。事実、第二と第三の対話は、いずれも信従希望者の願いとそれを拒絶するイエスの言葉から構成され、家族との絆、神の国のモチーフや *πρωτον*（まず）等、多くの表現を共有しており、両者間には顕著な並行性が認められ²³、これに加えて61節はルカ的な語彙を多く含んでいる²⁴。その一方で、62節のイエスの言葉（*οὐδεὶς ἐπιβαλὼν τὴν χεῖρα ἐπ' ἄροτρον καὶ βλέπων εἰς τὰ ὀπίσω*）は言語的に非ルカ的であり²⁵、ルカは当時流布していた諺を受け入れてこの箇所を構成したのかもしれない

20 T. W. Manson, *The Sayings of Jesus as Recorded in the Gospels according to St. Matthew and St. Luke Arranged with Introduction and Commentary*, London 1949, p. 72; W. Grundmann *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 204; K. H. レングストルフ『ルカによる福音書』（NTD新約聖書註解3）泉治典・渋谷浩訳、ATD・NTD新約聖書註解刊行会、1976年、277頁；J. Ernst, *Das Evangelium nach Lukas* (RNT), Regensburg 1977, p. 320; G. Petzke, *Das Sondergut des Evangeliums nach Lukas* (ZKB), Zürich 1990, p. 107; K. Löning, *Das Geschichtswerk des Lukas, II: Der Weg Jesu*, Stuttgart/Berlin/Köln 2006, p. 21.

21 M. Sato, *Q und Prophetie. Studien zur Gattungs- und Traditionsgeschichte der Quelle Q* (WUNT II/29), Tübingen 1988, p. 55; D. Kosch, *Die eschatologische Tora des Menschensohnes. Untersuchung zur Rezeption der Stellung Jesu zur Tora in Q* (NTOA 12), Freiburg Schweiz/Göttingen 1989, p. 418; F. Hahn, *Christologische Hoheitstitel. Ihre Geschichte im frühen Christentum* (UTB 1873), Göttingen ⁵1995, p. 83 n. 4.

22 M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, Tübingen ³1959, p. 159 n. 1; S. Schulz, *Q. Die Spruchquelle der Evangelisten*, Zürich 1972, p.435 n. 239; D. Lührmann, *Die Redaktion der Logienquelle* (WMANT 33), Neukirchen-Vluyn 1969, p. 58 n. 5; Miyoshi, op. cit., pp. 41-44; F. W. Horn, *Glaube und Handeln in der Theologie des Lukas* (GTA 26), Göttingen 1983, p. 194; Bovon, op. cit., p. 32.

23 Εἶπεν δὲ πρὸς ἕτερον, ἀκολουθεῖ μοι. ὁ δὲ εἶπεν, [κύριε,] ἐπίτρεψόν μοι ἀπελθόντι πρῶτον θάψαι τὸν πατέρα μου. εἶπεν δὲ αὐτῷ, ἄφες τοὺς νεκροὺς θάψαι τοὺς ἑαυτῶν νεκρούς, σὺ δὲ ἀπελθὼν διάγγελλε τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ. [59-60節] と Εἶπεν δὲ καὶ ἕτερος, ἀκολουθήσω σοι, κύριε, πρῶτον δὲ ἐπίτρεψόν μοι ἀποτάξασθαι τοῖς εἰς τὸν οἶκόν μου. εἶπεν δὲ [πρὸς αὐτὸν] ὁ Ἰησοῦς, οὐδεὶς ἐπιβαλὼν τὴν χεῖρα ἐπ' ἄροτρον καὶ βλέπων εἰς τὰ ὀπίσω εὐθεὶς ἐστὶν τῆ βασιλείᾳ τοῦ θεοῦ. [61-62節] を比較参照。

24 εἶπεν δὲ καὶについて、59, 60, 61, 62節参照。ἀποτάσσωは新約用例計6回中、ルカ文書に4回（ルカ9:61; 14:33; 使18:18, 21）使用されており、ἐνの代用としてのεἰςは新約用例計37回中、ルカ文書に25回使用されている。

25 Jeremias op. cit., pp. 182-183.

い。なお一部の研究者は、この言葉がイエスの真正の言葉である可能性を指摘している²⁶。

注目すべきことに、この第三の対話はエリヤとエリシャの召命の場面（王上 19:19-21）と関連しており、双方の物語とも、信徒志願者が家族との暇乞いを主人に懇願する場面が描かれている²⁷。その意味でも、おそらくルカは、この第三の信徒の対話を59節との対比とエリシャの召命物語との関連から編集的に構成したのであろう²⁸。

以上のことから、おそらくルカは、Q資料から得た二つの信徒対話（57b-60節）に導入句（57a節）と自ら編集的に構成したもう一つの対話（61-62節）を付加し、部分的に手を加えることによりテキスト全体を構成したのであろう。

4. 各節の検討

①第一の対話（57-58節）

段落冒頭の「さて、彼ら（一行）が道を進んで行くと」（καὶ πορευομένων αὐτῶν ἐν τῇ ὁδῷ）という導入句は、直前の段落末尾（9:56）の「そして、彼ら（一行）は別のある村に進んで行った」（καὶ ἐπορεύθησαν εἰς ἑτέραν κώμην）に対応しており、前段より始まったエルサレムへの旅の状況を改めて思い起こさせる。この状況のもとである人がイエスのもとに現われ、イエスがどこに赴こうとイエスに従って行くという決意を表明する（22:33; 黙示14:4参照）。ここでは、時、場所、登場人物等が特定されていないことから、このエピソードは例示的特徴を示して

26 ブルトマン、前掲書、50頁；H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, 367-368.

27 さらに、エリヤの行為（王下 1:10, 12）と結びつく54節も参照。

28 さらにMiyoshi, op. cit., pp. 52-55は、61-62節と14:33及び17:31との関連性を指摘している。なお、T. L. Brodie, *Luke 9:57-62: A Systematic Adaptation of the Divine Challenge to Elijah* (1 Kings 19), *SBL.SP* (1989) 237-245は、ルカ9:57-62全体と王上19章全体との並行関係を指摘し、Miyoshi, op. cit., pp. 56-57は、この三重の対話とエリヤ昇天の彼とエリシャとの三回にわたる信徒対話（王下2:2, 4, 6）との間の類似性を指摘している。

いる²⁹。一方のマタイ版では、イエスが弟子たちに向こう岸に行くように命じたとき、ある律法学者がイエスのもとに近づいてきたという設定でこの段落が始められており、後続のイエスによる嵐を静める奇跡（マタ8:23-27）を準備している。

信従志願者の決意表明を聞いて、イエスは「狐たちには穴があり、空の鳥たちには巣がある。だが人の子には頭を横たえるところもない」と格言的な響きをもつ言葉で答えている（並行マタ8:20; さらにトマス86; プルタルコス『英雄伝』「ティベリウス・グラックスとガイウス・グラックス」9.5も参照）。この言葉は元来、少なくとも穴や巣を有する動物たちに比べて人間の運命が不確かであることを語る、周辺世界に流布していた諺であった可能性も指摘されているが³⁰、これについては、通常人間は住まいをもっている点や、典拠が確認されていないことから反論も多い³¹。この言葉は、活発に動き回っていても自らの住みかをもつ動物と、定住地をもたずに放浪する人の子（ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου）とを対比的に描いており、「人の子」はここでは「人間」の意ではなく³²、明らかに「イエス」を指している（6:22; 7:34参照）。なお、T. W. マンソンは、狐はアンモン人、鳥はローマ人やエドム人等の異教徒の象徴であり、人の子は真のイスラエルを意味すると主張しているが³³、説得力に乏しい。

この言葉は何より、イエスが定住地（故郷）をもたないことと彼の徹底した貧困を強調している。ルカの文脈においては、故郷を去ったイエスが定住地を持たないことは、イエスのエルサレムへの旅、すなわち受難への道と密接に関わっており（9:51; 13:33参照）、ルカはここで、エルサレムで完成する、故郷を捨てたイエスの道行きを強調している³⁴。その一方で、この定住地をもたない旅人イ

29 Schürmann, op. cit., p. 35.

30 プルトマン、前掲書、49頁、S. Schulz, op. cit., p. 438 n. 260.

31 J. M. Creed, *The Gospel according to St. Luke. The Greek Text with Introduction, Notes, and Indices*, London 1965, p. 142; E. シュヴァイツァー『マタイによる福音書』（NTD新約聖書註解3）佐竹明訳、ATD・NTD新約聖書註解刊行会、1978年、289頁; J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-IX* (AB 28), New York 1983, p. 835; Schürmann, op. cit., p. 37.

32 S. Luria, *Zur Quelle von Mt 8:19*, *ZNW* 25 (1926) 282-286に反対。

33 Manson, op. cit., pp. 72-73.

34 Miyoshi, op. cit., p. 44.

エスの姿は前段のサマリア人による拒絶（9:51-56）と密接に関わり³⁵、また、段落冒頭の πορεύομαι（進んで行く）は、この段落を56節のみならず直前の段落全体（51-56節）と結びつけている（51, 52, 53, 56節参照）。

このイエスの返答は、信徒の意志を示した人物の思いそのものを否定するのではなく、人の子の運命を指し示すことによって、信徒から生じる必然的帰結を彼に知らしめようとしている。すなわち、イエスの弟子になろうとする者は、定住地をもたないイエスの生き様に自らも倣うことを肝に銘じておくべきであり、そのことから、イエスに信徒することは、故郷をもたない極貧の旅人としてイエスにつき従っていくことを意味している。

②第二の対話（59-60節）

第二の対話においては、イエスはまず別の「ある人」（cf. マタ8:21：「弟子の一人」）に従って来るように促している。しかしその人物は、その前にまず自分の父親を葬りに行かせて欲しいと願い出る。彼の父親がすでに死んでいたかどうかは明らかではないが、いずれにせよ、彼の願いは真っ当で理解できるものである。事実、死者の葬りは古代世界の各文化圏で死者への崇敬の念に基づく当然の行為として捉えられていた³⁶。例えば、古代ギリシアの悲劇詩人ソフォクレスの作品『アンティゴネー』は、主人公のアンティゴネーが僭主の禁令にも拘わらず兄を葬ったことが主題となっている。ユダヤ社会においても、両親を敬えとの十戒の第四戒のみならず、死者に対する愛の業は特に重視されており（シラ7:33; 22:11-12; 38:16-23; アヴォート1:2）、息子たちによって葬られる願望も一般化していた（創49:29-33; 50:1-13, 24-26; トビ4:3-4; 6:15; 14:9, 11-12; ヨベル23:7; 36:1-2, 18; 十二遺訓ルベン7:1; 十二遺訓レビ19:5; ヨセフス『ユダヤ戦記』5:545; フィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』1:13）。また、ファリサイ派に

35 Miyoshi, op. cit., p. 45; O. Glombitza, Die christologische Aussage des Lukas in seiner Gestaltung der drei Nachfolgeworte Lukas IX 57-62, NT 13 (1971) 14-23.

36 死者の葬りについては、Hengel, op. cit., pp. 9-10; H. Strack & P. Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch* (I), München 1922, pp. 487-489 及び同 (IV), München 1928, pp. 560-561, 578-592 (以下、Bill.と略記) 参照。

においても、死者に対する最後の奉仕はあらゆる善行の頂点と見なされ、シエマーの祈りや十八祈祷等の義務的な祈祷等の律法規程が免除されていた（ベラホート3:1; 18a）。

しかしイエスは彼の願いを拒絶し、「死人たちに自分たちの死人たちを葬らせなさい」と答える。この言葉はある意味で常軌を逸しており、確かに、見かけ上の並行例は旧約聖書にも（レビ21:1-3, 11; 民6:6-7; エレ16:5-7; エゼ24:15-24）³⁷、ヘレニズム文献にも（ルキアノス『デモナクスの生涯』65-66、クセノフォン『ソクラテスの想い出』1, 2, 53-55、プラトン『パイドン』115c-e参照）見られるが、実質的な意味での並行箇所は存在しない（イグナティオス・ローマ4:1も参照）。そして、この言葉はしばしばその過激さを抑える方向で解釈されてきた³⁸。

一部の研究者は、アラム語からギリシア語への翻訳の際に誤訳が生じたという理解から、最初の νεκρούς（<νεκροί [死人たち]）を「ためらう者たち」³⁹や「墓掘人」⁴⁰と解しているが、説得的でない⁴¹。また一部の研究者は、この言葉は、律法への批判としてではなく、死体との接触を忌避する当時のナジル人の生活様式との関連で理解すべきとしている⁴²。

特に問題となる最初の νεκρούςについては、これまでしばしば「霊的（精神的）な死者」の意で解されてきた⁴³。確かに νεκρός は、新約ではしばしば転義的な意

37 さらに Hengel, op. cit., pp. 11-13参照。

38 H. G. Klemm, Das Wort von der Selbstbestattung der Toten. Beobachtungen zur Auslegungsgeschichte von Mt. VIII. 22 par., NTS 16 (1969/70) 60-75; 大貫隆「死人たち」には未来がある—マタイ8,21f/ルカ9:59fの新しい読み方—『西南学院大学神学論集』、第69巻、第1号、2012年、2-5頁参照。

39 M. Black, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*, Oxford 31967, p. 207.

40 F. Perles, Zwei Übersetzungsfehler im Text der Evangelien, ZNW 19 (1919/20) 96; Noch einmal Mt 8,22 Lc 9,60, sowie Joh 20,17, ZNW 25 (1926) 286-287.

41 さらに、G. Schwarz, Ἄφες τοὺς νεκροὺς θάψαι τοὺς ἑαυτῶν νεκρούς ZNW 72 (1981) 272-276参照。

42 M. Bockmuehl, 'Let the Dead Bury their Dead' (Mt 8,22/Lk 9,60): Jesus and the Halakhah, JThS 49 (1998) 553-581.

43 W. Manson, *The Gospel of Luke* (MNTC), London 1930, p. 121; Hengel, op. cit., pp. 8-9; Schürmann, op. cit., pp. 40-41; Marshall, op. cit., p. 411; R. A. カルベンパー『ルカ福音書』（NIB新約聖書注解4）太田修司訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、277頁、さらにBill. (I):489参照。

味で用いられ(ルカ15:24,32; ロマ6:11, 13; エフェ2:1, 5; コロ2:13; 黙3:1)、ユダヤ教・キリスト教文書においては、罪人や異邦人の意でも使用されている⁴⁴。しかしながら、最初の νεκρούς を「霊的な死者」の意で解するなら、信徒志願者の父親を含む後続の νεκρούς も同様に「霊的な死者」を意味することになり、そうするとこの言葉は意味不明となる。その意味でも、「自分たちの死人たち」を葬るその死人たちも、葬られる死人たちと同様、実質的な意味での死人と見なすべきであろう⁴⁵。すなわちイエスは、「死人に死人を葬らせよ」という誇張を含んだラディカルな言葉で、今は死人たちのことよりもはるかに重要なことが問題になっていると語ろうとしている。

父親の葬りを拒絶するこのイエスの挑発的な返答は、律法重視の伝統を明らかに凌駕しており、ユダヤ思想においては冒瀆行為もしくは不敬行為と見なされた。その意味でこの言葉は、律法に対する絶対的自由の立場を表明しているが、その背景には、後続の第三の対話と同様、「終末時の試みの時における家族の崩壊の預言的・黙示的動機⁴⁶があると考えられる(ルカ14:26//マタ10:37; ルカ12:51//マタ10:34参照)。しかし、より重要なのは、マタイ版には言及されていない神の国の宣教(62節, 9:2, 10:9, 11も参照)への緊急の要求であり⁴⁷、ここでは神の国の宣教のために故郷と家族を棄て去ることが要求されており、何より切迫した終末状況における家族との断絶が問題になっている。というのも、真の命は神の国においてのみ存在しており、その意味でも、葬る人と葬られる人との区別は問題にはならず、神の国の告知の前では肉体の生も死も問題にならないからである⁴⁸。このような意味においても、イエスの信徒の要求はエルサレムへの旅という文脈と共に神の国宣教の要求と密接に関わっている⁴⁹。

44 Bill, (II), 1924, p. 489参照。

45 ルツ 1997:43-44頁; Klemm, op. cit., pp. 65-68; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 373; 大貫、前掲書、5-6頁。

46 Hengel, op. cit., p. 14.

47 Schürmann, op. cit., p. 41.

48 Wolter, op. cit., p. 373.

49 Miyoshi, op. cit., p. 46.

③第三の対話 (61-62節)

第二の対話と同様、この第三の対話においても、信徒に関わる家族との関係が問題になっている。第三の人物は最初の人物と同様、自らイエスに近寄り、信徒の意志を表明する。ここでも第二の対話と同様、イエスの信徒の呼びかけが前提とされていると見なすことも可能であろう⁵⁰。しかし彼は、第二の人物の場合と類似して、従って行く前にまず家族に別れを告げることを望んでいた。前述したように、この場面は、エリヤにつき従う前に家族と暇乞いする許可を求めたエリシャの召命物語と密接に関わっている（王上19:19-21; ヨセフス『ユダヤ古代誌』8:354参照）。

イエスの要求はエリヤの要求以上にラディカルであり、エリヤがエリシャの願いを認めたのに対し、イエスは彼の願いを「鋤に手をかけてから後ろを振り返る者は、神の国にふさわしくない」という言葉で突き返している（ヘシオドス『仕事と日』441-445; エピクテートス『提要』7）⁵¹。なお一部の研究者は、エリシャが畑を耕している際に（ἡροσπία）エリヤから召し出された（王上19:19）という点に注目し、61節のみならず62節もエリシャの召命物語に関連づけようとしているが⁵²、エリシャはこのとき耕すのをやめているという意味でも（王上19:19-20）、彼の振る舞いはイエスの鋤の言葉に厳密には適合していない。

視線を前に向けることによってのみ鋤で耕すことが可能になるが、同様のことはイエスの信徒についても当てはまり、前方を見据える者のみが（9:51参照）神の国に相応しい（εὐθετος, cf. 14:35）。それゆえ、信徒者は自分自身の目的、すなわち神の国に集中しなければならず、家族、所有、住居等の他のあらゆるものは二義的であるだけでなく、完全に視界からははずれている。まさに自分たちがその奉仕のために召し出された神の国を見据えて、イエスの弟子たちはその視線を前方に固定しなければならないのである（創19:17, 26; フィリ3:3参照）。

50 Schürmann, op. cit., p. 43.

51 Bill.(II), pp. 165-166参照。

52 Miyoshi, op. cit., p. 55; Schneider, op. cit., p. 233; D. A. S. Ravens, Luke 9:57-62 and the Prophetic Role of Jesus, *NTS* 36 (1990) 119-129; L. T. Johnson, *The Gospel of Luke* (Sacra Pagina Series 3), Collegeville 1991, p. 163.

5. テキストの機能と意味

ルカ9:57-62のテキストは、三名の匿名の信徒志願者を扱っており、それぞれがイエスにつき従って行くという望みをもっていましたが、その思いは十分なものではなかった。最初期の弟子たちは信徒の際に自主的にすべてのものを捨て去ったように（5:11, 28）、これらの信徒志願者はイエスから、彼らの故郷のみならず彼らの家族とも別れを告げるように要求される。すなわち彼らは、自分の故郷も家族も棄て去ったイエスの生き様（マコ3:31-35並行；ルカ6:1-6a並行）に倣うことが要求されており、何より切迫した終末状況における決断が求められているのである。

信徒志願者に対するイエスの要求の徹底性は、イエスのエルサレムへの旅の文脈において理解すべきであろう。彼らは今やイエスと共にエルサレムにおける受難への道を歩むべきなのであり、イエスの苦しみに与らねばならず、その意味でも、自らの故郷を捨て、家族との関係も放棄して、自らの道を歩まねばならないのである。

ルカにおいては、これらの要求は特定の人物ではなく匿名の信徒志願者に向けられている。このことは、ルカがこの厳格な要求をイエスの時代の弟子たちに限定するのではなく、彼の時代のキリスト者に向けて語っていたことを示しており、この点はまた、イエスへの信徒が神の国宣教との関連で記されていることから確認できる。もっとも、確かにルカはイエスの直弟子たちが一切の所有を放棄したように描写しているが、その一方で、彼が当時のキリスト者に故郷と家族の放棄を文字通りに要求したとは考えにくい。むしろ、ルカは敢えてそのような厳格な要求を彼らに突きつけることによって、決然とした覚悟をもって神の国の宣教に従事するように求めようとしたのであろう。

その意味では、このテキストは今日のキリスト者に対しても同様に、決然とした覚悟をもってイエスに信徒し、神の国の宣教に従事することを求めていると考えられる。